



第4回 食の新潟国際賞 受賞者決定！

本賞に 岩永 勝 氏（日本）

30年にわたる海外国際研究機関での指導者経験と研究成果、国際的な活動

世界各国から多数の推薦

第4回食の新潟国際賞の受賞者選考は昨年8月15日～12月25日の期間、世界各国から推薦応募があり、書類審査を経て、第4回食の新潟国際賞選考委員(委員長 唐木 英明、別添名簿)による第1次選考が行われました。

その後5月20日、東京において開催された選考委員会に於いて、最終受賞候補者が選定され理事会に答申されました。

6月27日に開催されました理事会において、唐木選考委員長出席のもと最終選考が行われ4名の受賞者が決定されました。

特に佐野藤三郎特別賞は原則1名の受賞枠でしたが、今回初めて2名の方が受賞されました。

本賞 = 岩永 勝 氏

国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター(JIRCAS)理事長
国際とうもろこし・小麦改良センター(CIMMYT)元所長 (日 本)



生物資源の保存活用研究に従事し多くの業績を上げ国際的に高い評価を受けている。

海外国際農業研究機関で30年近く活躍した。特に2002年には「緑の革命」の功績によりノーベル平和賞を受賞した国際とうもろこし小麦改良センター(CIMMYT.メキシコ)の所長に国際公募で選ばれ、財政難の組織を再建し、長期研究戦略を設定、職員数800人を超える世界で最も優秀な国際研究機関へと飛躍させた実績は世界的に高い評価を得た。

長きにわたる国際的な研究活動での広汎な人脈を培い、世界的に影響力を持つ農学研究者及び指導者として2006年には世界食糧賞から特別感謝状を受賞。国連世界食料安全保障委員会のパネラーなど国際機関や国際会議において理事に就任するなど重責を果たしている。

1951年8月生まれ 65歳

第4回 食の新潟国際賞 受賞者決定！

本賞受賞者コメント

今回食の新潟国際賞という名誉ある賞をいただくことに本当に嬉しく思います。

この道に進んだきっかけは、ある日読んだ新聞記事です。

1970年、私が大学1年生の時に読んだ新聞記事に感激しました。皆さんご存知の通り、農学の分野にはノーベル賞というのはありません。ところが1970年に農学研究者がノーベル平和賞を受賞しました。アメリカ人の小麦の品種改良の専門家であるノーマン・ボローグという方が国際とうもろこし・小麦改良センター(CIMMYT)で小麦の品種改良を行い、それが成果を上げて「緑の革命」と言われるようになり、多くの人を飢餓から救ったことでノーベル平和賞を受賞しました。その記事を読んだ時、非常に感激しまして、私も「品種改良という技術を身につければ世の中に貢献できるんだ」と思うようになり、そしてまた、ボローグ氏と同じように国際研究機関で働いてみたいと思うようになり、大学、大学院でその道に添って研究を進めました。その後、希望通り30年近くに渡って国際農業研究機関で働くことができました。

受賞の対象となった私の業績としては多分二つあるかと思います。一つは品種改良あるいは生物多様性の専門家としての仕事。これは30代、40代の頃だと思えます。そしてそれからもう一つが組織運営、あるいは国際開発全体を見渡した中での活躍だったのではないかと思います。

特に私が本当に憧れた国際とうもろこし・小麦改良センターの所長に公募で選ばれて、そしてその6年間の任期の中で、いくつかの大きな業績を上げることができたのが評価されたのではないかと思います。

今後の豊富ですが、現在働いている所はとても良い所です。日本の農学研究の力を国際貢献に使っていくことをミッションにしている研究機関です。今後もその組織のトップとして仕事をしたいと思っております。

(7月29日の「第4回食の新潟国際賞受賞者発表記者会見」のコメントから抜粋)

「第4回食の新潟国際賞」受賞候補者の選考について



選考委員長 唐木英明(公益財団法人 食の安全・安心財団理事長)

今回は食の新潟国際賞第4回目ということでございますが、今回は過去3回に負けず、あるいはそれよりも素晴らしい受賞者の方々を選考できたことを大変嬉しく思っております。

選考の仕方につきましては、まず候補者を募る期間が昨年(2015年)の8月から12月まで募集をいたしました。その結果、日本を含む世界8カ国から非常に多数の候補者が寄せられました。

その候補者を今年の1月から2月にかけてまして選考委員が書類選考をいたしまして、5月に選考委員会を開催して候補者を決定いたしました。

選考委員会の役割というのは一つの賞に対して複数の候補者を選考するところで、その結果を6月27日に行われた理事会で複数の候補者の中から1人あるいは2人の受賞者を決定するという仕組みになっております。

(7月29日の「第4回食の新潟国際賞受賞者発表記者会見」のコメントから抜粋)

第4回 食の新潟国際賞 受賞者決定！

佐野藤三郎特別賞 = 増本 隆夫氏

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
農村工学研究部門 地域資源工学研究領域 領域長(日本)



高度な国際協力の達成に寄与。

低平地帯の排水改良、排水問題を検討し排水施設の最適規模研究では雨量計や排水施設の配置、規模計画手法を開発し、現場での計画管理に直結する技術開発に多数研究実をあげ、水田の洪水防止機能評価法の開発でも先駆的で高度の研究業績をあげた。

アジアモンスーン水田地帯にも対象を広げ、国際河川メコン河の研究では4研究機関を率いるリーダーとして世界的情報発信が可能な研究成果体制の構築を図り、行政の事業実施指針・計画基準に反映高く評価された。

1957年11月生まれ 58歳

受賞者コメント (7月29日の「第4回食の新潟国際賞受賞者発表記者会見」のコメントから抜粋)

今回、食の新潟国際賞佐野藤三郎特別賞を受賞いたし、誠に光栄に存じております。この喜びは所属しております研究機関の農研機構の先輩、同僚、さらに後輩たちに伝えたいと思います。また、私をこの研究分野に導いてくれました大学の恩師に、加えて陰ながら支えてくれた家族にも感謝の念を示します。同時に審査頂いた選考委員の方々にも御礼を申し上げます。

これまでの研究活動のどこが評価されたかを私なりに考えますと、二点あると思っております。一つは国際貢献、すなわち研究成果の国際展開であります。もう一つは地域への貢献ということです。

一つ目の活動の国際貢献であります。これまでの研究を一言でまとめますと、「風土に適合した持続的水田水利用方式の提案と国際展開」ということになります。特徴的なモンスーンアジアの農業水利用を全世界に伝えようとした活動です。

もう一つの地域貢献については、具体的にお示しします。20年前になりますが、低平地帯の排水問題の一部として開発していました「知識情報を用いた出水予測法」は、故佐野藤三郎氏が理事長を務めておられました亀田郷土地改良区の排水施設管理に実際に利用され、そしてまたその後改良されたという経緯があります。

更に新潟県の西蒲原地区は広大な農業地帯ですが、機械排水管理費に関する課題、いわゆる都市化のために農業と都市が共存しているために農地側と都市側の間で排水機場の管理費の負担問題がある中、問題解決のための基礎的情報を出してきたこと、すなわち費用分担問題に対して具体的な根拠を示すことが出来たことは大きな地域貢献に繋がったと考えております。

最後に、今回の受賞を期にした今後の展開と豊富です。これまで開発してきました水循環モデルは、まず日本の新潟県の関川流域や現在住んでおります地域を含む利根川流域等に適用してまいりました。そして次に日本全国の336流域全てに適用しました。それをさらに対象を広げてメコン川流域内の中国、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナム等に展開しました。これまでは水田稲作やそこでの水利用を研究対象の中心としてきたわけですが、今後は、モデルを畑地農業が主体となっているヨーロッパ、北米、南米等を含む全世界に適用拡大していきながら、世界の農業水資源の今後を検討し、ひいてはそれを持って人類の生活向上へ繋がる活動ができれば幸いと思っております。

第4回 食の新潟国際賞 受賞者決定！

佐野藤三郎特別賞 =マーシー・ニコル・ワイルダー氏

国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター 水産領域 主任研究員(アメリカ)



エビ類の研究により、稚エビの培養方法で多大な成果を上げ、学会産業界で高い評価を得る。ベトナムの国際プロジェクトの担当として淡水エビの養殖産業の発展に貢献。屋内型エビ生産システムの開発と普及による安全安心な養殖の実現をした。

バナメイエビは世界の養殖の80%を占め、養殖場の造成による環境汚染、高密度養殖による病害、大量薬物投与などの解消に屋内型エビ生産システムを企業と共同開発した。妙高市「妙高ゆきエビ」を商業ベースに乗せ、モンゴルでの養殖も進んでおり、多くの発展途上国において、動物性タンパク質の増産安定供給が期待できる。

1965年12月生まれ 50歳

受賞者コメント (7月29日の「第4回食の新潟国際賞受賞者発表記者会見」のコメントから抜粋)

この度は栄誉ある佐野藤三郎特別賞を受賞することができ、大変光栄に存じます。

近年エビ養殖業が世界的に大きな産業となっており、その市場価値が伸びております。しかし集約的なエビ養殖の拡大に伴い、東南アジアでのマングローブ林の破壊、海洋汚染といった環境問題が発生し、また、エビの病気を防ぐために抗生物質など、不適切な試薬投入などが行われていることが現状であります。このようにエビ養殖が生産国にとって重要な収入源になっているものの、その産業自体が不安定で問題を抱えていることは事実です。そこでは持続的である科学的な養殖技術が必要であると考え、研究室のレベルから現場に至るまで持続的なエビ養殖の技術開発をライフワークとして取り組んで来ております。

エビのホルモンの働きを解明することで、養殖現場においてエビの成長を促したり、人為的に卵を産卵させたりすることが可能であると考えており、このような基礎研究を進めながら貧困稲作農家のために、稲作と並行する淡水エビ養殖の種苗生産技術開発をしました。その後、ハイテクで環境への影響を最小限に抑えた養殖システムを実現するために、民間企業と連携して技術開発を進めました。その結果世界初の屋内型エビ生産システムの設立に至り、2007年9月より、新潟県妙高市にて薬剤を一切使用せず、淡水に近い条件で海水エビの商業的生産を開始しました。海外に置いても注目を集め、昨年モンゴルでエビプラントが設置されました。

現在、発展途上地域ではエビ養殖によって多くの人が生計を立てております。この人たちのためにも、安全安心で環境にやさしい持続的なエビ養殖生産方法を提供する必要があります。今回の受賞はその意味では大きな奨励となり、その目的に向かって更なる努力をしていきたい所存です。

今後の研究活動の中で、国内外において、屋内外でエビ生産システムの更なる普及を計ることと、まだ不明の多いエビの生殖機構を解明し、安定した種苗生産技術を開発することを目標として尽力していきたいと思っております。そして微力ながら、次世代の研究者を育てながら研究開発を通じて社会貢献を実現できることを伝えていきたいと存じます。

最後に本日の賞に至るまで御支援、御協力いただきました全ての方に改めて感謝を申し上げます、受賞の言葉といたします。

第4回 食の新潟国際賞 受賞者決定！

21世紀希望賞＝宇賀 優作 氏

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構、次世代作物開発研究センター
基盤研究領域 育種素材開発ユニット 上級研究員(日本)



一貫してイネの根の構造と機能に関する遺伝育種学的研究を展開し、基礎から応用に至るまでの研究に多くの成果をあげ、国際誌に論文を掲載し高い評価を得ている。

地球温暖化が一層深刻化する中、干ばつによる大きな影響を受け東南アジアでの稲作の乾燥耐性強化は喫緊の課題である。フィリピン在来品種に見いだした根の形態や構造の変異に着目し、遺伝子座を検出し、栽培稲の耐干性の向上に大きく貢献した。研究業績は基礎研究にとどまらず世界の稲作の安定化に貢献し今後の研究の進展が期待される。

1974年11月生まれ 41歳

受賞者コメント (7月29日の「第4回食の新潟国際賞受賞者発表記者会見」のコメントから抜粋)

今回このような栄えある賞を受賞することが決まったと連絡を受けまして、非常に嬉しく思っております。この賞を受賞するにあたり、私の恩師であった奥野員敏先生の推薦、また賞の選考にあたってご尽力された関係各位の皆さま、また私の研究を陰で支えてくれた研究スタッフ、家族、みなさまにこの場を借りて厚く御礼を申し上げたいと思います。

私の研究は、一言で言ってしまうえば稲の品種改良なのですが、あまりみなさんに馴染みのない干ばつに強い稲を作るということを目指してやって参りました。日本にいますと、イネの栽培といえば綺麗な美田をイメージされると思います。新潟の場合、昔は低地で大変だったという事を聞いて驚いておりますが、海外に目を向けますと、灌漑施設が無い雨水に頼った天水田が広がっています。昨年はタイで20年に一度の大干ばつが起こり、多くの農家の方が苦労されたと聞いています。実際、日本の稲作面積の約14倍の面積が干ばつの影響を受ける水田であると言われていています。このような地域で稲作をしている農家の方が、安心して稲の栽培ができることを目指して、大学を卒業してから研究所に入って12年以上、この研究を進めてきました。

私の研究は稲が干ばつでも地面の下にある水を利用できるように、根っこをより深くするという一見地味な研究なのですが、「これまで地道にやってきた研究が評価された」という風に感じています。

品種改良といってもこれまでの交配法にDNAマーカーという遺伝子の目印を使ったゲノム育種という方法を使っています。このゲノム育種により雨が一ヶ月くらい降らなくても従来の品種よりも2倍から3倍ほど収穫できる干ばつに強い稲を作ったのですが、まだ農家の手元には届いていません。本成果は現時点では基礎研究にとどまっていますが、21世紀希望賞をいただいたからには、こういう成果を途上国の干ばつに苦しんでいる農家の人に届けたいという気持ちでこの先も研究に邁進してまいりたいと思います。

● 食の新潟国際賞 選考委員会

(五十音順)

職名	氏名	所属・職名
委員長	唐木 英明	(公財)食の安全・安心財団 理事長 東京大学 名誉教授
委員	赤阪 清隆	(公財)フォーリンプレスセンター 理事長
委員	石井 勇人	一般社団法人共同通信社 編集委員兼論説委員 農政ジャーナリストの会 会長
委員	今野 正義	日本食糧新聞社 代表取締役会長CEO
委員	柴田 明夫	(株)資源・食料問題研究所 代表取締役
委員	生源寺 眞一	名古屋大学大学院生命農学研究科 教授
委員	西澤 直子	石川県立大学生物資源工学研究所 教授 東京大学 名誉教授
委員	引野 肇	中日新聞社 編集委員 日本科学技術ジャーナリスト会議 副会長
委員	平山 征夫	新潟国際情報大学 学長
委員	デイビッド・C. ミラー	米国大使館 農務部 農務担当公使

● 表彰式スケジュール

第4回国際賞表彰式は11月9日(水)に開催

第4回目を迎える食の新潟国際賞は11月9日(水)に新潟市の朱鷺メッセ(国際会議室)で開催いたします。

是非多くの方からご出席いただきますようご案内申し上げます。

主な行事	時刻	会場
記者会見	13:30～	朱鷺メッセ 3階 会議室
表彰式	15:00～16:00	同上 4階 国際会議室 (マリンホール)
受賞者記念講演	16:10～17:40	
受賞祝賀会・交流レセプション	18:00～20:00	ホテル日航新潟 朱鷺の間

(第3回表彰式の様子)



(朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター)



「第4回食の新潟国際賞」受賞者発表 初めて日本プレスセンター(東京)で受賞者発表記者会見を開催

「第4回食の新潟国際賞」の受賞者が決定し、その記者発表が7月29日(金)日本プレスセンター(東京都)で開催され新聞・テレビ・専門雑誌などの報道関係者が多数出席しました。

「食の新潟国際賞」の国内外へ発信と認知度を高めるために、今回初めての試みとして東京において開催されました。

冒頭、池田 弘財団理事長から挨拶と国際賞の創設趣旨の説明された後、各賞の受賞者が発表されました。続いて、篠田 昭新潟市長(当財団副理事長)から国際賞の誕生の経緯とその意義について説明があり、唐木 英明選考委員長(食の安全・安心財団理事長)からは選考経過と各受賞者の受賞理由が報告されました。

最後に本賞受賞者の岩永 勝氏(64歳)、佐野藤三郎特別賞の増本 隆夫氏(58歳)、同マーシー・ニコル・ワイルダー女史(50歳)、21世紀希望賞の宇賀 優作氏(41歳)の各受賞者から受賞の感想やこれまでの活動紹介、今後の目標など、国際賞受賞の喜びに満ちた和やかな雰囲気の中での記者会見となりました。



佐野藤三郎氏の足跡を巡る「中国三江平原訪問団」(参加者募集中)

食の新潟国際賞の冠でもある「佐野藤三郎氏」の中国・三江平原における足跡をたどり、その偉業と国際協力を再確認する中国訪問団を派遣することになりました。

今回の訪問は黒龍江省政府の全面的な協力をいただき、佐野藤三郎氏と共にプロジェクトに直接参加した本財団理事の中山輝也氏からもご同行いただき現場で貴重な当時の話もお聞きできることになっております。是非ご参加ください。

三江平原の龍頭橋ダム



1. 訪問期間 平成28年9月25日(日)～30日(金) 5泊6日
2. 訪問地 中国ハルビン市、ジャムス市、大慶市
(三江平原地域、食糧生産基地、農業食品企業)
3. 参加費 198,000円 新潟空港発着(エコノミークラス、全食事付き)
4. 問い合わせ・申込み先 財団事務局へご連絡下さい (025-201-8901)

平成28年度理事会及び評議員会を開催、各議案が承認されました。 新役員を選出、新体制がスタート

平成28年度理事会(6月27日於:新潟市)と評議員会(7月13日於:東京)が開催され、平成27年度事業報告・及び決算、定款の変更、および役員改選が審議され、評議員会に於いて承認されました。(以下概要報告)

1. 定款の変更

(1) 理事定数の変更

(現行)理事 10名以上16名以内 → (変更後) 理事 10名以上18名以内とする

(2) 顧問を置く

(現行)特別顧問及び相談役を置くことができる。→ (変更後)特別顧問及び相談役、顧問を置くことができる。顧問は理事長が選任し、この法人の運営に関して、理事長の諮問に応じて意見を述べるができる。

2. 役員の変更

平成28年度は理事・監事(任期2年)、評議員(任期4年)の同時改選時期に当たり、理事会が評議員会に提案し承認されました。

役員改選では、平山征夫氏(評議員)、坂本元子氏(評議員)五十嵐祐司氏(監事)からそれぞれ辞任の申し出があり、了承されました。新たに評議員として今野正義氏(日本食糧新聞社 代表取締役会長 CEO)、青山浩子氏(農業ジャーナリスト)が選任されました。また定数が2名増員された理事には吉田 至夫氏(新潟経済同友会 代表幹事)と富山栄子氏(事業創造大学院大学 副学長)が、監事には栗山 敏昭氏(㈱栗山米菓代表取締役社長)と石塚 純(第四銀行営業本部 地方創生推進本部・コンサルティング推進部 担当部長)氏がそれぞれ選任されました。財団創設にかかわり、設立以来当財団支えていただきました平山征夫氏、坂本元子氏、五十嵐祐司氏の3名には池田理事長から今後も当財団に対しご指導とご支援いただきたい旨のお願いが感謝の言葉が述べられました。

役員名簿は下記の通りです。

食の新潟国際賞財団役員名簿

H28. 7. 13現在
(順不同)

理事

	氏 名	所属・役職
理事長	池田 弘	(学)新潟総合学園総長
副理事長	篠田 昭	新潟市長
副理事長	田中 通泰	亀田製菓(株)代表取締役会長CEO
副理事長	吉田 康	(株)ブルボン代表取締役社長
常務理事	鈴木 伸作	(公財)食の新潟国際賞財団事務局長
理事	五十嵐 豊	亀田商工会議所会頭
理事	石黒 正路	新潟薬科大学副学長
理事	今井 長司	新潟県農業協同組合中央会会長
理事	大坪 研一	新潟薬科大学教授
理事	小田 敏三	新潟日報社代表取締役社長
理事	門脇 基二	新潟大学教授・副学長
理事	齋藤 吉平	新潟県酒造組合顧問
理事	佐藤 功	佐藤食品工業(株)取締役会長
理事	高橋 秀松	新潟商工会議所副会頭
理事	富山 栄子	事業創造大学院大学教授・副学長
理事	中山 輝也	(株)キタック代表取締役社長
理事	吉田 至夫	新潟経済同友会代表幹事
理事	山我 森寛	亀田郷土地改良区理事長

評議委員

氏 名	所属・役職
安斎 隆	セブン銀行代表取締役会長
青木 浩子	農業ジャーナリスト
唐木 英明	(公財)食の安全・安心財団理事長
北原 保雄	新潟産業大学学長
小泉 武夫	東京農業大学名誉教授
今野 正義	(株)日本食糧新聞社代表取締役会長CEO
寺田 弘	新潟薬科大学学長
高橋 姿	新潟大学学長
辻井 博	京都大学名誉教授
並木 富士雄	第四銀行取締役頭取
服部 幸應	(学)服部学園理事長
山口 寛治	奥野総合法律事務所特別顧問
山本 正治	新潟医療福祉大学学長

監事

氏 名	所属・役職
石塚 純	第四銀行営業本部兼地方創生推進本部 コンサルティング推進部長
栗山 敏昭	(株)栗山米菓代表取締役社長
野崎 正博	一正蒲鉾(株)代表取締役社長

相談役

氏 名	所属・役職
武田 修三郎	日本産学フォーラムファウンディングディレクター
栗山 清	㈱栗山米菓 相談役

特別顧問

氏 名	所属・役職
古泉 肇	亀田商工会議所顧問

公益財団法人 食の新潟国際賞財団 賛助会員(平成28年度)

● 特別会員

亀田製菓(株)
(学)新潟総合学院
佐藤食品工業(株)
新潟県農業協同組合中央会
(株)栗山米菓
(株)新宣
亀田商工会議所
(株)電通東日本新潟支社
NST新潟総合テレビ
三菱商事(株)新潟支店

(株)ブルボン
一正蒲鉾(株)
(株)第四銀行
亀田郷土地改良区
(株)新潟日報社
(株)エイケイ
(株)新潟クボタ
にいがた22の会
(株)日本食糧新聞社
ホテル日航新潟

● 正会員

新潟市農業協同組合
新潟県信用組合
(株)第一印刷所
(株)本間組
石本酒造(株)
(株)ミカサ
神山物産(株)
丸七商事(株)
ハセガワ化成工業(株)
大東産業(株)
藤屋段ボール(株)
(株)タケショー
(株)新潟博報堂
BSN新潟放送
新潟陸運(株)
医療法人愛仁会亀田第一病院
(株)新潟食品運輸
山崎醸造(株)
月島食品工業(株)
(株)フジテレビジョン
日本製粉(株)関東支店
日本甜菜製糖(株)

(株)鳥梅
(株)山由製作所
新潟工科大学産学交流会
(株)キタック
北越工業(株)
丸榮製粉(株)
新潟万代島総合企画(株)
鍋林(株)ヘルスフーズ事業部
(株)鈴木コーヒー
TeNYテレビ新潟放送網
(株)栗田工務店
三和薬品(株)
松田産業(株)
セッツカートン(株)新潟工場
(株)藤井商店
日本精機(株)
東邦産業(株)
麒麟山酒造(株)
(株)加島屋
(株)日本フードリンク
(株)アド・メディック
UX新潟テレビ21

● 個人会員

藤島 安之
大越 斎
和田 充彦
河内 直史
古泉 肇
五十嵐 豊

佐藤銀治郎
宇野 勝雄
新保 房機
栗田 浩
長谷川宏志
尾山 宏輔

久保田紳一
和澄 孝男
塚本 太一
牧 利幸
井田 増夫
高橋 常孝

(順不同)